

研究ノート

スポーツ身体表現専攻における3年間の振り返りと 今後の取り組みの提案

—特に実技科目を中心として—

渋谷 聡¹・服部 由季夫¹・林 直樹¹・高木 由起子¹
田中 操²・山本 健太²・小澤 勇人²・阿部 あずさ²

Recapitulation of Three Years and Future Agenda in the Major in Sports and Physical Expression about Especially Practical Skill Subjects

SHIBUYA Satoshi¹・HATTORI Yukio¹・HAYASHI Naoki¹・TAKAGI Yukiko¹
TANAKA Misao²・YAMAMOTO Kenta²・OZAWA Hayato²・ABE Azusa²

The Major in Sports and Physical Expression has been established in Seisa University Faculty of Life Network Science in 2013. Seisa University has just only a distance learning system. In the major in Sports and Physical expression, a teachers' license of P.E. can be gain in a distance learning system. Seisa University is just one and only university in that a teachers' license of P.E. can be gain in a distance learning system.

So there are a lot of problems that do not have a precedent. We are groping for solutions against these problems now. We looked for any problems, and we tried to solve them to run the major. We suggest such matters about especially practical skill subjects in this report.

Keywords : The Major in Sports and Physical Expression, one and only, problems, practical skill subjects, agenda

キーワード : スポーツ身体表現専攻、唯一無二、実技科目、振り返り、提案

1. 目的

スポーツを通して共生社会を目指すことを目的に、スポーツ身体表現専攻（以下、本専攻とする）が星槎大学共生科学部共生科学科に設置されてから3年が経過した。これまでは、学生の学修環境としてスクーリング会場、備品の整備や担当教員の確保を優先的に行い、ある一定の成果をあげていると考えられる。しかし、「求められていることに応える」という星槎の考え方や、よりきめ細やかな学生への指導を目指している大学として、常に改善していく必要がある。

¹ 星槎大学共生科学部

² 星槎大学事務局担当

そこで本研究では、本専攻がこれまで行ってきた取り組みの振り返りと現状の課題を整理し、今後の活動への対応を提案していく。これによって、本専攻は今後どのように発展していくべきか、あるいは星槎大学が発展していくために本専攻が何をすべきかを考える重要な機会になると考える（渋谷聡）。

2. これまでの振り返りと課題の明確化

1) スポーツ身体表現専攻および保健体育免許取得希望者の在籍者数

(1) 一般学生

本専攻では、保健体育免許取得に関わる科目があるため、正科生だけではなく、保健体育免許取得を希望する科目等履修生も在籍する。在籍状況を表1に示した。

表1 スポーツ身体表現専攻および保健体育科目等履修生の入学者数（人）

	正科生 (1年次入学・ 4月生)	正科生 (3年次編入学・ 4月生)	科目等履修生 (4月生)	科目等履修生 (連携校4月生)	正科生 (1年次入学・ 10月生)	正科生 (3年次編入学・ 10月生)	科目等履修生 (10月生)
2013年度	4	11	20	0	2	22	29
2014年度	9	69	68	60	10	33	41
2015年度	26	69	82	85	15	24	42

年度が進むにつれて、入学者が増える傾向にある。特に、2015年度の科目等履修生（4月生）から増えていることは、現職教員が教科の追加として保健体育免許を取得するために入学していることや、現役大学生が連携生として併修するなど学修の多様化が背景にある。また、正科生（1年次入学・4月生）が3年目に増加していることから、本学が通信制大学で唯一保健体育免許が取得できることが広く知られてきたことが一要因と推察できる。問題としては、科目等履修生が正科生よりも多いという点である。連携大学・専門学校（以下、連携校）生は仕方のないことだが大学として不自然であり、正科生、特に1年次入学生を増やしていくような対策が必要である（高木由起子）。

(2) 連携校

本専攻あるいは保健体育免許取得に関わる連携大学は8校あり、その在籍者数は2013年度0名、2014年度61名、2015年度49名と2年目から増加している。また、連携専門学校は3校（そのうちの1校は8校舎）あり、2015年から61名が在籍している（阿部あずさ）。

2) 卒業生・満期退学者の免許取得状況

表2に中高保健体育免許の取得状況を示す。これには、本専攻で卒業して免許を取得した学生と、学士あるいは他の免許をすでに持っている、保健体育免許取得を希望する科目等履修生に分けられる。

年度を重ねるごとに、科目等履修生の免許取得者数は増えているが、正科生は増えてい

表2 中高保健体育教員免許状取得状況（人）

年度	学生区分	中学校1種免許	中学校2種免許	高等学校1種免許	計
2013年度	正科生	0	0	0	0
	科目等履修生	6	0	6	12
2014年度	正科生	0	0	0	0
	科目等履修生	29	2	33	64
2015年度	正科生	2	0	2	4
	科目等履修生	40	8	38	86

い。これは、科目等履修生が他大学を卒業している人が多く、2年間で免許に必要な科目のみ単位を修得していることによる。これに対して、正科生は保健体育免許取得に必要な科目だけではなく、卒業に必要な単位も修得する必要があることから、2年間で必要単位を修得することが難しいために免許取得者数が少ないと考えられる（山本健太）。

3) 中高保健体育教員免許取得者による就職状況

中高保健体育教員として採用された人数は、2014年度は1名だったのに対して、2015年度は7名と着実に結果を残している。しかし、この情報はあくまでも自己申告によるものである。通信制大学は、現職教員が学生として学ぶことも多いため、学校種の変更を行うなど必ずしも全員が教員採用試験を受験するとは限らない。このため、科目等履修生の卒業後の就職状況を把握することは、全日（通学）制大学に比べて難しい。ただし、正科生の就職状況については、マンツーマン指導担当教員や教職総合支援センターとの連携によって今後重点的に調査を進めていくことは可能である（山本健太）。

4) 実技科目、実技を伴う科目、資格関連科目の履修状況

ここでは、スポーツ身体表現専攻専門科目群の実技科目および実技を伴う科目を表3に示す。

2013年度、2014年度は使用可能な施設数が少なかったため、履修科目に偏りがみられる。とりわけ、水泳Ⅰの履修者数が少ないことがわかる。また、保健体育科指導法ⅢおよびⅣは選択科目に該当することから今後も一定数の横ばいが続く見込みである。

2015年度から大学・専門学校との教育連携を始めたことにより施設の通年使用が継続的に可能となったことから、「1. 目的」でも触れたように会場の確保は一定の成果をあげているといえる。これにより、履修者数の偏りは解消されつつある（山本健太）。

5) 実技科目の指導と学生の学修状況

本専攻の実技科目は、スクーリング4日間で構成される。必修は、表3の上から9科目である。これらのアドバンスの授業としてⅡを設置している（しかし、各科目Ⅱが実際に開講されたのはバドミントンⅡの1回のみである。各科目Ⅱの開講に関しては、今後の課題の一つとして挙げられる）。ここでは必修9科目のうち、体づくり運動Ⅰを例にして具体的

表3 スポーツ身体表現専攻専門科目群の実技科目および実技を伴う科目の履修状況

科目名	2013年度	2014年度	2015年度
体づくり運動Ⅰ	32	141	124
器械体操Ⅰ	18	89	106
陸上Ⅰ	24	124	151
水泳Ⅰ	10	79	191
バドミントンⅠ	19	138	125
サッカーⅠ	26	79	163
バレーボールⅠ	26	71	191
柔道Ⅰ	20	72	131
ダンスⅠ	16	92	160
保健体育科指導法Ⅰ	51	136	277
保健体育科指導法Ⅱ	39	113	140
保健体育科指導法Ⅲ	2	27	45
保健体育科指導法Ⅳ	2	32	43
救急処置法	36	101	184

に述べていく。

体づくり運動は、運動に対して「嫌い」「不得手」といったネガティブなイメージを持つ生徒にアプローチすることを重視し、「競争・勝敗を主目的としない」「達成や自己評価を重視する」ということを念頭に、「気づき」「調整」「交流」の観点を常に考えさせる授業である。例えば、「ブラインドウォーク」は視覚を遮断して歩行を行うワークである。視覚情報のない状態では、まず恐怖を感じ、音、風、光などの情報を収集していくことによって自身の歩行を成立させようとする。この体験をもとに視覚障がい者が日々感じていることにまで学修を結びつけることを目的としている。

振り返りでは、運動における「気づき」の意義について深く考えていることが見られる。また、「ダブルダッチ」は、回し手2人が2本のロープを両手に持ち半周ずらして回し、跳び手が跳ぶという縄跳びワークである。多くの学生が初体験で、巧く跳べるようになる者もいれば、「できない恐怖」を感じてしまう者もいる。このような状況から、グループワークの中で共に課題を達成させることと「できなかったことができた達成感」を感じさせることが狙いとしてある。このワークでは「共生」を考える場面が多かったと振り返る学生は多い。そして、最終試験は科目修得試験（レポート方式：以下R試験とする）という形で行われる。「スクーリングを通して感じ、学んだ成果をR試験において表現する」ということをR試験課題に設定している。

体づくり運動授業の問題点と対策としては、以下のようなことが挙げられる。

- (1) 意外に運動量が多いことから、怪我の頻度は決して低くはない。

特にダブルダッチにおいての足関節捻挫や下腿部痙攣・肉離れなどは多く見られる。(ウォーミングアップ・クールダウンの推奨やワークの順序の変更などの対策を考えている。怪我に関しては、スクーリング内容確認書にて情報共有をしている。)

(2) スクーリングで学んだことを「レポート方式」で表現することが不得手である。

メールによる提出前指導を勧めている。1度の提出で即完成という学生はほとんどおらず、事後学習という意味でも重要な取り組みとなっている。(R 試験として提出するよりも短い時間間隔にて指導ができるというメリットがある。)

(3) ワークの創造をする際に「勝ち負け」「競争」ということを安易に選択しがちである。スクーリング時にもう少し強く印象づけられるよう、工夫していく必要がある。

以上が体づくり運動における具体的な学修状況である。他の実技科目においても、さまざまな問題点を抱えているが、上述したようにスクーリング報告書の中や事務局員の協力により問題を見つけ、プロジェクトにて話し合いを行うことで問題克服に努めている(林直樹)。

6) 実技科目に関する事務対応と学生の履修状況

(1) 一般学生(連携校以外の在学学生)への対応

全ての学生に質問窓口としてメールや電話で対応しているが、実技科目については、定員が設けられているためスクーリングの登録・日程変更については慎重に対応している。また、スクーリング時の声掛けおよび個別の履修相談で学生の学修スタイルに合わせた提案をしている。

スクーリングは受講日数が多いため、働きながら学んでいる学生の都合により、直前あるいは途中でキャンセルすることがある。また、本来2次募集は、やむをえない理由による緊急対応の枠として、あるいは申込者数に余裕があった場合のみ行うのだが、それを初めから当てにしている学生がいる。そのため、受講できないか受講日が遅くなる等の問題が出ている。スクーリング追加スケジュールを毎週更新しているため、追加履修登録が多くみられる反面、年度計画が立てられないことから、年度中の免許取得が必要であるにも関わらず学修計画を立てられていない学生もいる。

そのほか、学生指導の面では、開催会場でのルールを守る(車での来校は控える、喫煙場所以外での喫煙はしないなど)ことを事前連絡しているが、それでもルールを守らない学生、道路渋滞を遅刻の理由とするものや校門で喫煙する学生がいる。このままでは会場借用ができなくなる可能性もあることから、学生がルールを守るような対応をさらに検討していく。教員を目指す者として、あるいは人としてルールを守ることは当然であり、自覚をしっかりと持つよう指導していく必要がある。

(2) 連携校学生への対応

連携校窓口の担当者と常に連絡を取り合い、学生が学修をしやすいよう双方でサポートしている。具体的にはスクーリング定員が満員もしくは締め切り後に申し込みがある場合や、やむをえない理由で受講をキャンセルする場合は、別日の案内を行うなど適切な対応をしている。また、学納金に関わってくる履修変更・キャンセルについては、登録日・入金状況を確認し、複数の目で慎重に対応している。

全ての連携校学生がそうだとは言えないが、近い将来、教員として教壇に立つという意識が低く、個人的な用事や部活動等で直前あるいは無断でスクーリングを欠席する学生がいる。その都度、指導しているが、過度に学生をサポートすることによって学生が主体的に学ぼうとするのではなく、職員任せの姿勢が見受けられるのも事実である（連携校先の職員も本学任せにする場合もある）（阿部あずさ）。

7) 実技科目におけるケガの状況および対応

3年間の実技科目スクーリングにおけるケガの状況を表4に示す。

表4 実技科目スクーリング時の負傷者数（人）、科目、症状

年度	負傷者数	科目名	主な症状
2013年度	1	器械体操I	中臀部の肉離れ
2014年度	6	バレーボールI、器械体操I	右膝下打撲、左足首捻挫、首の痛み、下肢の肉離れ
2015年度	3	体づくり運動I、陸上I、バレーボールI	足指の骨折、ハムストリングの痛み、突き指

多くのスクーリングを開催しているが、骨折や肉離れ、捻挫や打撲などさまざまな症状が見られる。2015年度の負傷者が減少した理由は、スクーリング内容確認書を教職員間で共有し、事前にケガに対する対策をしたことが考えられる。また、スクーリングを重ねることによって、ケガのリスクを減らすような内容でスクーリングの工夫をしていることも考えられる。どちらにしても、負傷者数を減らすことは今後も継続して行っていきたい（服部由季夫）。

8) 卒業生・在学生の声

本専攻の入学生に対して、インタビュー調査（構造化）を行い、その結果を表5および表6に示した。

実技科目でよかった点は、入学年度が新しくなるにつれて、科目ではなく授業の内容に関する声が多くなっている。その他では、専任教員の対応や学生関係についての学びに対する好意的な意見があった。

実技を伴う科目では、保健体育科指導法Iに対して意見が集中した。保健体育科指導法IとIIの授業内容に関しては、後述する保健体育科指導法の打合せにおいて、しっかりと内容を住み分けることが確認された。保健体育科指導法Iのレポートに関しては、量を書けば合格するのではなく、テーマを読み解き、データを調べ、論拠を示していることが合格につながることを確認している。

実技科目では、柔道Iの指導内容に対する改善の意見が出ていた。これは、担当教員と幾度となく話し合いを行い、本専攻完成年度を過ぎた2017年度からある程度の成果を見せることができると考えている。改善点全体を通してみると、年度を重ねるにつれて、授業の内容に対する改善点よりも教務的な改善点が多く出ていることから、スクーリングスケジュールを迅速に作成することを心がけていきたい（林直樹、渋谷聡）。

表5 授業に関する卒業生・在学生の声（よかった点）

	よかった点		
	実技科目	実技を伴う講義科目	その他
2013年 4月生	<p>【陸上、バドミントン、柔道】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やったことがない競技を体験できたこと。まだ少人数だったのできめ細かく指導してくれた。 	<p>【保健体育指導法Ⅱ～Ⅳ】</p> <p>〇〇先生（指導法Ⅱの担当教員）の指導と何を学ぶのが明確でわかりやすかった。</p>	特になし
2014年 4月生	<p>【サッカーⅠ、バレーボールⅠ、バドミントンⅠ、陸上Ⅰ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の進め方・生徒への投げかけの仕方はもちろんのこと、学生たちの技術面も見てくれたのですごく良かった。座学の時間も非常に充実しており、各競技の基本的な知識から教えてくれた。 <p>【体づくり運動Ⅰ、ダンスⅠ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな授業をすれば良いのかが全く想像つかなかった科目だったが、自分自身が楽しく授業に参加できたことにより、今も勉強中ではあるが、ある程度は授業の組み立てができるようになってきた。 ・取得しなければならぬ種目が多く大変と感じたことも多かったが、苦手な科目も教えるという視点から取り組むことが出来たことは良かった。特に、ダンスの授業は楽しくて、現在学校教育で必修になったこともあり、教えるノウハウがたくさん詰まった授業でよかった。 ・運動が得意な生徒より、苦手な生徒に対して「少しでも出来る様になる」「運動が楽しい」と思える方法を具体的に学ぶ事ができた。 	特になし	特になし
2015年 4月生	特になし	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・意識の高い同志との共学において、自分自身の意欲にも大きな影響を受けた。また、意識の低い学生達への対応を皆で話し合ったりもした（「これも現場へ出た時のための経験」などと話し合った）。多くの経験をさせてもらっていると実感している。 ・色々な人が集まっているのにも関わらず、目標は皆一緒という連帯感を感じることができた。
2015年 10月生	<ul style="list-style-type: none"> ・ある科目において評判の悪い方の先生に当たったが、自分としてはかえって良かったと思った。友人は、その先生を避けて他の時期のSCを選んでしたが、振り返ってみると自分としてはこの先生の教えには共感する部分もあったように思う。 	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・マンツーマンの先生、専任の先生が親身なところがとても良い。頼れる存在だった。

表6 授業に関する卒業生・在学生の声（改善点）

	よかった点		
	実技科目	実技を伴う講義科目	その他
2013年 4月生	【ダンスI】 ・評価基準がわからない。	【保健体育科指導法I】 ・とにかくレポートが厳しく、授業内容とレポートが連動しなかった。大学設定の文字数が意味をなさないほどの量を書かないと合格しなかった。	特になし
2014年 4月生	・スポーツ科目のⅡにぜひ参加したい気持ちが大きかったが、Ⅰとかぶっていることが多く、必修できないⅡは諦めざるを得なかった。共生研究で何となく事情は分かっているが、参加したかった！ ・バスケットの授業があったら嬉しかった…。	【保健体育科指導法I】 ・教育実習先で指導法Iでもらったデータを基に作った所、書式から指導を受け、内容も指導案になっていないとご指導頂いた。指導法Iで授業の進め方を細かく見てくれるのは良かったが、指導案については添削が無かったので、指導案の書き方も丁寧に教えてくれたら嬉しかった。（指導案を、受講済みの生徒からデータをもらい、授業の概要も聞いた上で受講前に作成している人がいたことや、そういう情報のない人は、私を含め夜中までかけて作った学生を多く見聞きしたので、フィードバックが全くなかったことを不満に感じた。） 【保健体育科指導法II】 ・指導法Iと内容が重複している部分が多く、どう違ったのかよく分からなかった。	特になし
2014年 10月生	【柔道I】 ・スパルタ式の稽古法だったため、その分の客観的な稽古理念や指導法に対する考え方をプリント化して解説して欲しかった。スパルタ式の稽古法もあって良いと思う。様々な練習スタイルに触れることで幅が広がるので大事なことだと思う。 ・先生や授業により内容が大きく異なるので、そこは改善して欲しかった。 ・実際に教員になるために（指導者になるために）授業を受けているので、その視点で授業を受けたかった。 ・〇〇先生（陸上の主担当）のように、場面指導を授業の中で取り入れてくれる先生ばかりではなかったのが残念でした。 ・柔道の授業では、ほぼ丸二日は受身の練習を行い、生徒の怪我也多く、絞め技までテストする必要があるのかと疑問に思った。	【保健体育科指導法I】 ・レポートの厳しさに対して講義の難易度の深さが欲しいと思った。資料や論文といったものの配布も多くし、更にわかりやすく解説することによって、レポートの難易度とつり合うと思った。レポートが厳しいことは良いことだと思う。	・今回9種目を実技で行いましたが、種目数を減らして、一つの種目の時間を増やすことが出来たら（カリキュラムの問題ですが）良かったと。
2015年 4月生	特になし	特になし	・意識の高い学生がいる反面、連携学生が入ってくるようになって、意識の差を感じずにはいられなかった。学ぶ中で害を感じることもあった。 ・4日間開講なので、日程がうまく合わないことが多々あって、履修計画の作成に苦労した。
2015年 10月生	特になし	特になし	・10月生に対しての情報発信が遅いので、予定をなかなか決められない。履修が出来ない期間があり、選択の幅が想定よりも狭くなった。 ・事務職員さんの対応に差があること。「私にはわからないのでこちらにメールしてください」と言われてしまうことがある。急いでいるから電話をしているのに、メールをし直さなければならないのは不満が残る。結局のところ、マンツーマンの先生や特定の事務職員さんに頼ることになってしまう。もったいないと思う。

9) 管理運営の取り組み

(1) 実技科目スクーリングスケジュール、担当教員、会場

表7に、実技科目スクーリングスケジュール、担当教員、会場の一例を示す。

表7 実技科目のスクーリングスケジュール、担当教員、会場の一例

科目名	日程/曜日				教員	地域	スクーリング会場
	6/18(土)	6/19(日)	6/25(土)	6/26(日)			
体づくり運動I	6/18(土)	6/19(日)	6/25(土)	6/26(日)	林	大阪府	大阪青山大学
	7/16(土)	7/17(日)	7/18(月)	7/23(土)	林、高木	埼玉県	平成国際大学
	7/25(月)	7/26(火)	7/27(水)	7/28(木)	林	北海道	芦別キャンパス
	12/17(土)	12/18(日)	12/23(金)	12/24(土)	林	宮崎県	宮崎産業経営大学

実技科目のスクーリングは、会場（地域）によって受講者数が大きく異なる。例えば、関東で開講される実技科目の場合、通常定員40名に対して35名を超える。一方、札幌や福岡にて開講する場合、定員40名に対して20名以下になることが多い。理由として考えられることは、地域別の入学者数の差が顕著なためである。関東での入学者数に比べ、北海道や九州からの入学者は少ない。また、実技科目の開講数が北海道、九州は少ないため入学者の獲得につながっていないと考えられることから、今後対策を立てていく必要がある(小澤勇人)。

(2) 実技科目スクーリングによる定員

本専攻の実技科目および実技を伴う科目は、20科目以上あるが、その中の1つとしてバレーボールのスクーリング定員を表8に示す。

表8 バレーボールIのスクーリング定員

スクーリング科目名	実施月	最大定員	定員		2次受付
			4月生	10月生	
バレーボールI	7	40	20	15	5
	8	40	35	5	—
	10	40	32	8	—
		40	25	10	5
	11	40	20	10	10
	12	40	20	10	10

実技科目および実技を伴う科目のスクーリングについては、安全面の確保と教育効果を最大限もたらす人数を定員としている。なお、受講者数・施設設備によってはTA（指導助手）も配置している。最大定員は施設設備の関係上変更はないが、実施月によっては4月生と10月生が受講できる人数に違いがあるため、そのバランスを考慮してそれぞれの定員を定め、かつ、免許申請に関わる学生がいることを想定して2次受付（募集）を展開する時期もある。また、連携校学生は重要であるため、連携校枠を設けている。入学の段階で枠を設けておくことによって入学希望者を多く募ることができるからである。しかし、過度に連携

校用にスクーリング人数を設定することによって一般学生の枠が少なくなるデメリットもある。あるいは、再履修学生の割合により新規学生の申し込みを妨げてしまう可能性もあるため、1年間で修得できない学生をいかに減らすかが今後の課題と言える。さらに、満席にならなかった、あるいは、受講条件が満たなかった場合、定員に空きがある状況で実施することが本音と建て前の関係からもどかしい。

総じて、定員を設けている以上、履修登録者を上回るスクーリング回数を実施しなければ、「いつでもどこでも誰でも」という本学の基本方針が実現できない。今後は北海道、関東、中部、関西、九州での全科目実施に向けて施設の確保が急務である。また、年間を通じて優先使用あるいは契約できる施設を今以上に全国各地に広げることが必要であろう（山本健太）。

(3) 備品の管理

年度が進むにつれて入学者数が増えていることから、それに伴って実技科目のスクーリングに合わせて必要備品を随時揃えてきた。実技科目に必要な備品は、基本的に番号をつけて一覧表により箱根キャンパスで管理している。ボールなど外部開催会場で使用する場合は、備品貸出表に記録し、紛失などがないように心がけている（服部由季夫）。

10) プロジェクト

(1) 第1次プロジェクト：2013年2月～2014年9月

2013年4月より本専攻が開講することから、同年2月からスクーリング会場の選定、必要備品の購入・維持・管理、スクーリングスケジュールの作成・管理、学生や担当教員の対応を行った。

(2) タスクフォース：2014年10月～2015年10月

2014年9月に在学生在が急増し、その後も増大することが予想されたことを受け、タスクフォースを立ち上げて実技科目スクーリング会場、担当教員、必要備品の調整を行った。

タスクフォースメンバーの努力および大学全教員の協力のもと、増加した在在学生および入学生に対してスクーリング日程、会場、担当教員を準備することができた。

(3) 第2次プロジェクト：2015年11月～現在

2014年11月24日（水）から、本専攻に関わる教職員が定期的にミーティングを行うことによって、開講科目や学生の情報を教職員で共有し、学生の学修環境をよりよくすることを目的としている。このプロジェクトは2016年4月より教育改善室傘下となり必要な情報および議事録を改善室長に報告している。具体的な活動内容は、連携校の情報共有、スクーリングスケジュールの作成および追加スクーリングの検討、スクーリング会場の開拓および視察、非常勤教員の開拓、学生対応、イベント企画・検討、プロジェクト内情報共有方法の作成などである。本専攻在学者が年々増加する中、スクーリング会場や教員の日程調整、備品の確認を教職員が一体となって行うことができていく。また、学生の情報が職員からいち早く教員に伝わり、速やかな対応ができていく。学生に対する教員からの要望も職員が率先して対応してくれている。大学の2本柱である職員と教員の協力体制を十分発揮することができている（渋谷聡）。

11) 教職員間の情報共有

(1) スクーリング内容確認書の作成および提出

実技科目は同じ科目であっても複数の教員が単独でスクーリングを行っている。そのため、2015年4月よりスクーリング内容確認書を担当教員から報告することによって、スクーリング内容の確認やケガ人およびその対処法の把握し、学生のフォローアップを行っている。この確認書を提出するようになって、比較的ケガのリスクの高い実技科目のスクーリングスケジュールを、4日間連続ではなく土日、土日の2日間ずつに分けるなどの工夫ができるようになった。また、教職員がケガをした学生に対して、その後の履修計画や学修計画の相談にのるといった迅速な対応ができるようになってきている。

(2) プロジェクト内の情報共有方法の取り決め

2015年12月に、プロジェクトでの情報共有だけではなく、課題解決の手順などを取り決めた。具体的には、共有情報を必ず文書で残すことと、報告や変更などを含めた情報の共有はメーリングリストに載せること、外部とのやり取り（メールなど）は必ずプロジェクトリーダーにccをつけることである。こうした取り決めにより、その後の情報共有およびプロジェクトの活動は、比較的スムーズに行われている。

(3) 保健体育科指導法の授業内容の打合せ

保健体育科指導法Ⅰ～Ⅳにおける学生の情報共有および科目による住み分けの確認と、実技科目との連携を強化するための情報収集を目的に、2016年2月21日（日）に横浜事務局で打合せを行った。本専攻が開設された当初の住み分け（指導法Ⅰは体育実技中心、指導法Ⅱは保健中心）を再度確認し、これに指導法Ⅰ・Ⅱは模擬授業中心、Ⅲ・Ⅳは指導案作成を中心に行うという共通の認識ができた。ただし、学生に対しては、まだこの情報は不十分であるため、今後情報発信をしっかりと行っていく必要がある（渋谷聡）。

3. 今後の取り組みとしての提案

上述したように本専攻の3年間の振り返りを行い、明確になった課題の解決に向け、今後の提案を行う。

1) 学生募集に関する事項

(1) 1年次正科生の入学者数を増やす

- ①スクーリングスケジュールを早めに周知する。
- ②中学社会・高校公民の教育実習巡回指導で本専攻の周知をする。
- ③星槎グループの高校生に本専攻の周知を行う。
- ④連携専門学校の学生を科目等履修生ではなく、正科生(1年次・4月生)として入学させ、マンツーマン指導として積極的に学修指導やレポート指導などを行う。

(2) 地方会場のスクーリング受講者数を増やす（入学者数増加含む）

スクーリングスケジュールを早めに作成し、地方会場でもある一定期間内に卒業や保健体

育免許が取得できる計画ができていることを明記する。

2) 管理運営面に関する事項

(1) 就職状況を把握する

教職総合支援センターと連携し、正科生には教職ガイダンスや教職実践演習などで就職状況を確認する。科目等履修生には、教職課程登録時から保健体育名簿一覧を作成管理し、定期的な情報収集を行う。

(2) 実技科目Ⅱのスクーリング開講日を増やす

①早めにスクーリングスケジュールを決定する。

②実技科目ⅠでⅡについての周知を行う。

(3) スクーリング2次募集の表示方法を変更する

2次募集は緊急対応が優先されることを周知徹底するとともに、スクーリング申し込み表に記載している2次募集の欄を「-」とし、必要な時期に開示する。

(4) より多くの開催会場を確保する

①スクーリングスケジュールを早めに決め、各会場に年間計画を提示し、借用依頼をする。

②正式な依頼として、学長名などですべての会場に依頼書を提出する。

③会場の確保として、グループ内の協力を丁寧に依頼する。

④全国の学習センタースタッフの人脈を活用し、実技科目のスクーリング会場の紹介をしてもらう。

(5) より詳細な負傷者の把握・管理

現在行っているスクーリング内容確認書をプロジェクトメンバーリングリストに一元化し、非常勤教員にもメールや打合せなどで共有する。

3) 学習に関する事項

(1) 再履修の学生を減らす

質問窓口やマンツーマン指導、2016年度から開始したオフィスアワーの活用をポータルサイトや新入生オリエンテーションなどで周知していく。

(2) R試験再提出者を減らす

①入学時にテストを行い、基礎学力を高める必要のある学生には特別講座、あるいは個別指導を行う。

②講義科目、実技科目のスクーリングに合わせて、専任教員が個別相談会を行う。

③事後学習の課題提出などによって担当教員との綿密な指導関係を強化する。

(3) 勝負だけにこだわらない授業づくり、教材づくりを行う

事前学習として競争しない授業づくり、教材づくりを検討する。

(4) 学修スケジュール（スクーリング含む）を計画的に立てる

①年度初めに教職員に相談するようポータルサイトにアップする。

- ②計画の立て方がわからないのか、追加スクーリングスケジュールを待っているのかを把握する。
- ③入学志願書にスクーリング計画相談の有無を確認できる欄を設け、マンツーマン指導教員へ速やかに伝える。
- (5) 教員になる意識を高める（ルール守る、主体的に学ぶことを含む）
 - ①ポータルサイトに注意事項を載せ、開催会場の状況を説明する。
 - ②学生への説明会や教職員との情報交換会をより多く開催する。
 - ③星槎教育実践研究会への参加を促す。
- (6) 保健体育科指導法ⅠからⅣの内容を学生に周知する
学習指導書での明確に記載し、その旨をポータルサイトにアップする。

4) 全体を通して

上述した事項全てを同時に行うことは難しいが、これからしっかりスケジュールを立て、学生の学修環境を整えること、授業の質を向上させることを重点的に考えていきたい。

学生の声にもあったように、「働きながら保健体育免許を取得できるのが星槎大学だけだから」という入学理由ではなく、「星槎大学で学ぶと素晴らしい教員になれる、生徒のことを考える教員になれるから」としていきたい。また、星槎大学で学ぶことによって、「スポーツや体育を通して共生社会の重要性に気づき、それをこれからの教育活動やスポーツ活動に生かしていきたい」と言ってもらえるような学修環境、学修指導ができるよう今後も積極的に取り組んでいきたい。